

特 116

210

新編 四世 國語 歌集

福井縣今立郡岡本村大瀧

岩野 製紙 場



始



特116
210

御挨拶に代へて

越前奉書漉元の本場に生れて、早くから紙に親んだ私は、この純粹の日本紙を益々改良して、特に丹青撥墨の道に従はれる方々の御用に立て、一層紙本の妙味を深くせしめたいと考へまして、數年以來、東西の學者名匠の御指導を仰ぎつゝ、漸く理想に近いものを漉出すやうになりました。

今度、この新製畫紙を、「大瀧紙」「大徳紙」と名付けて、廣く發賣するに當りまして、御披露の爲め、この小冊子を編んで御清鑒に供したいと存じます。御一讀の榮を得て製品の御採用と御吹聴とを願はれますならば、至極光榮と存じます。

大正十四年二月

岩野平三郎



新製日本畫紙案内

目次

上、はしがき

中、五箇の紙

一、越前五箇	三
二、製紙のはじまり	四
三、奉書紙の製造と領主の保護	五
四、舊幕府時代の盛況	七
五、明治以後の發達	一〇

下、「大瀧」「大徳」紙の完成

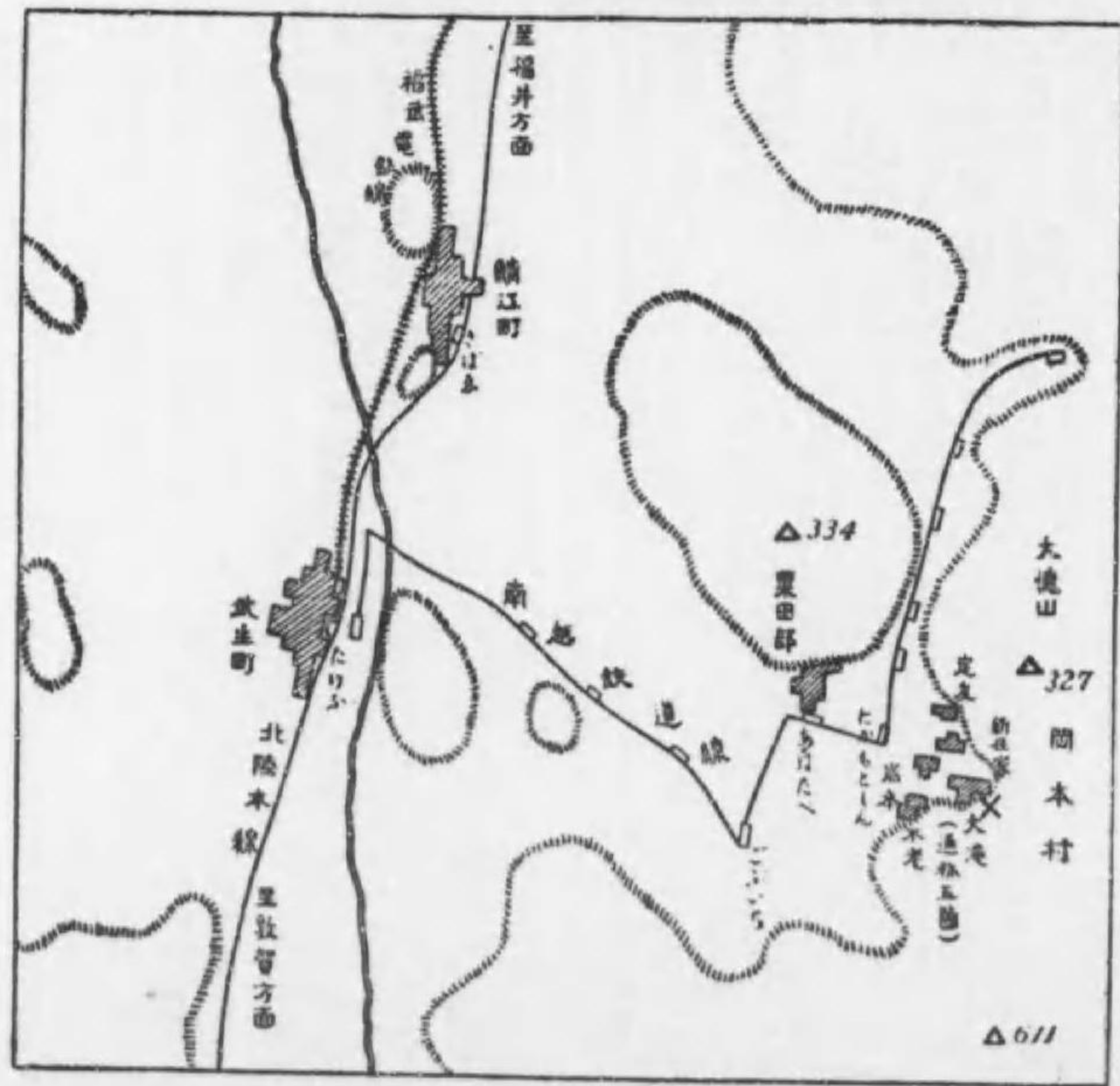
六、日本畫紙の製造と端緒	二二
七、完成迄	二四
八、新製畫紙の試用と名匠の批評	二六
九、特許と献上	二八

挿入圖版

- 第一版 越前岡本村附近圖
- 第二版 岩野製紙場
- 第三版 竹内栖鳳先生柳郷盛暑圖
- 第四版 横山大觀先生月明圖

越前岡本村附近圖

北陸本線武生驛で越前線に換乗して三十分
 七つ目の停留所岡本新下車五町東
 大瀧區岩野製紙場の中程。



100,000:1 X 岩野製紙場

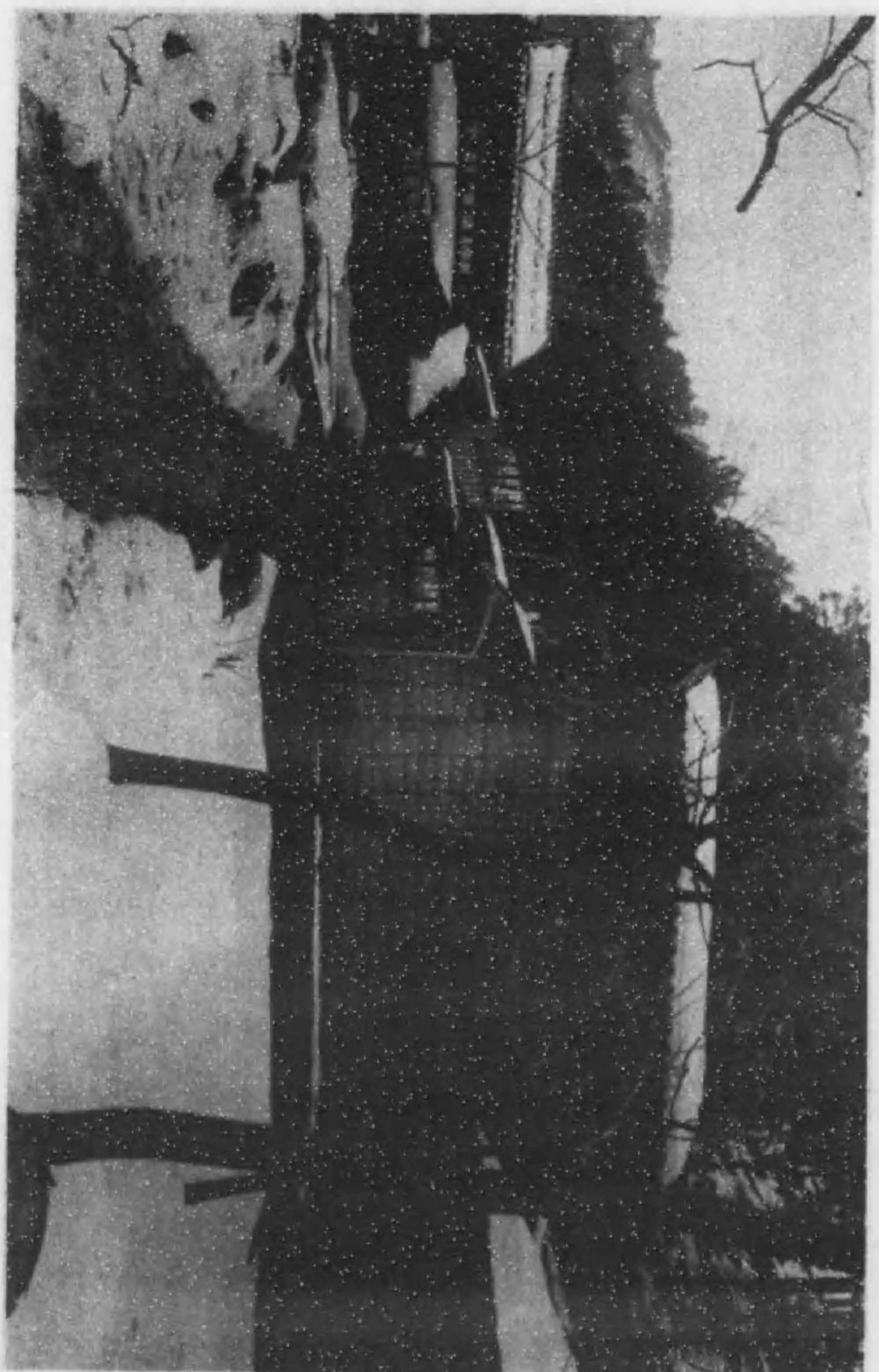
(桂井未翁氏)越前五箇行

「大瀧」大徳紙定價表

岩野製紙場主要製品

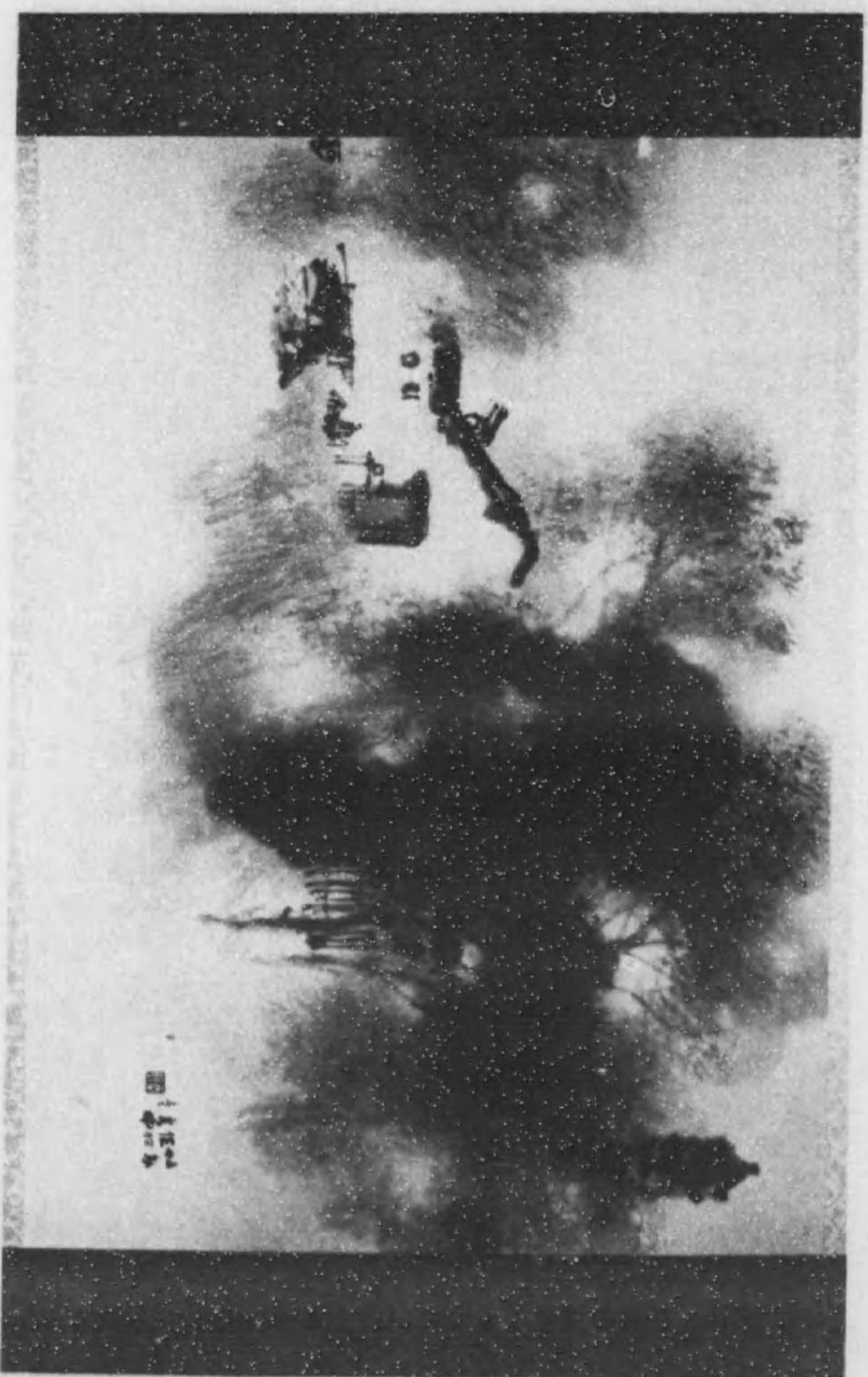
書翰竹内栖鳳畫伯

表紙裝畫及題簽富田溪仙畫伯



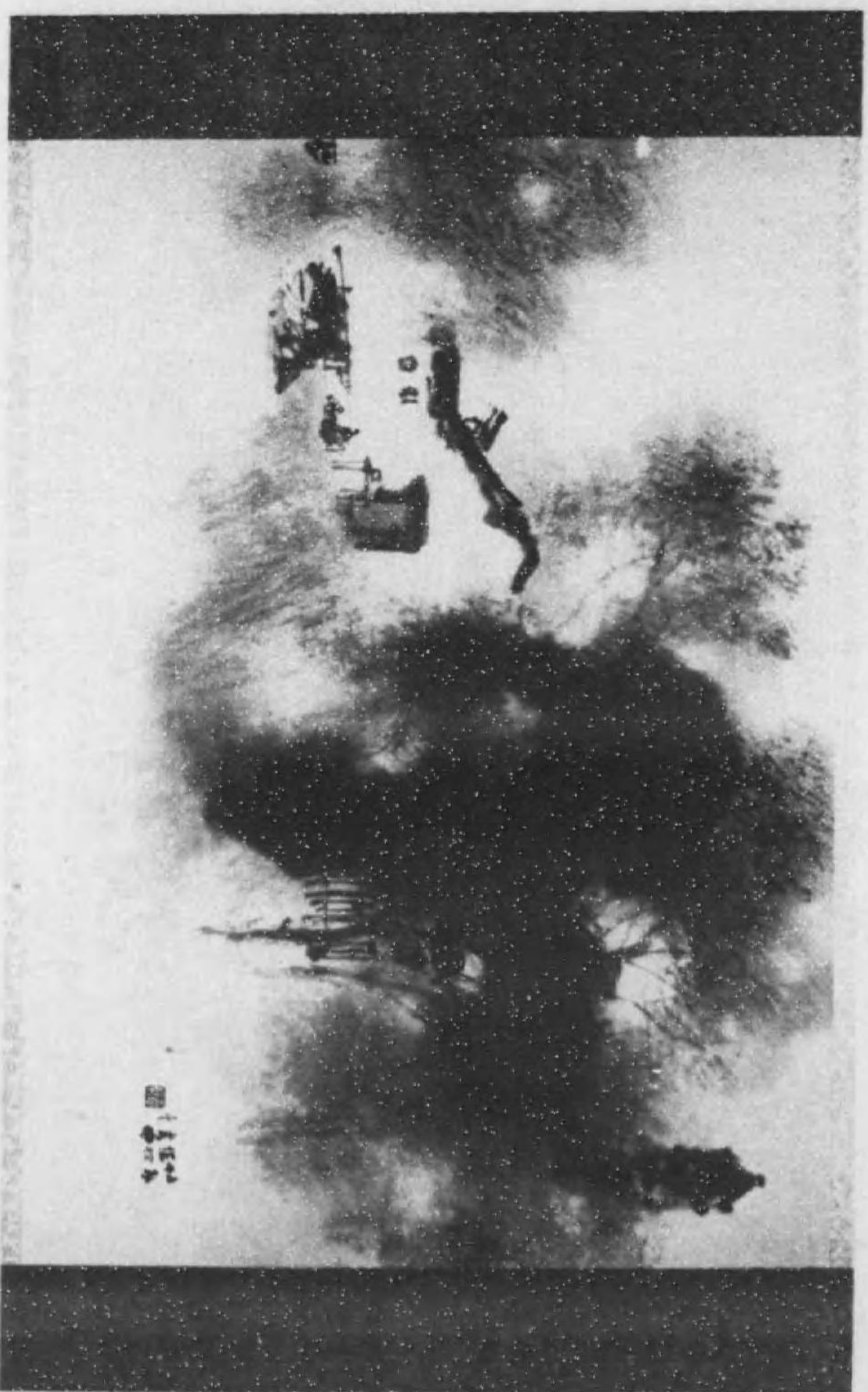
第二版

岩野製紙場



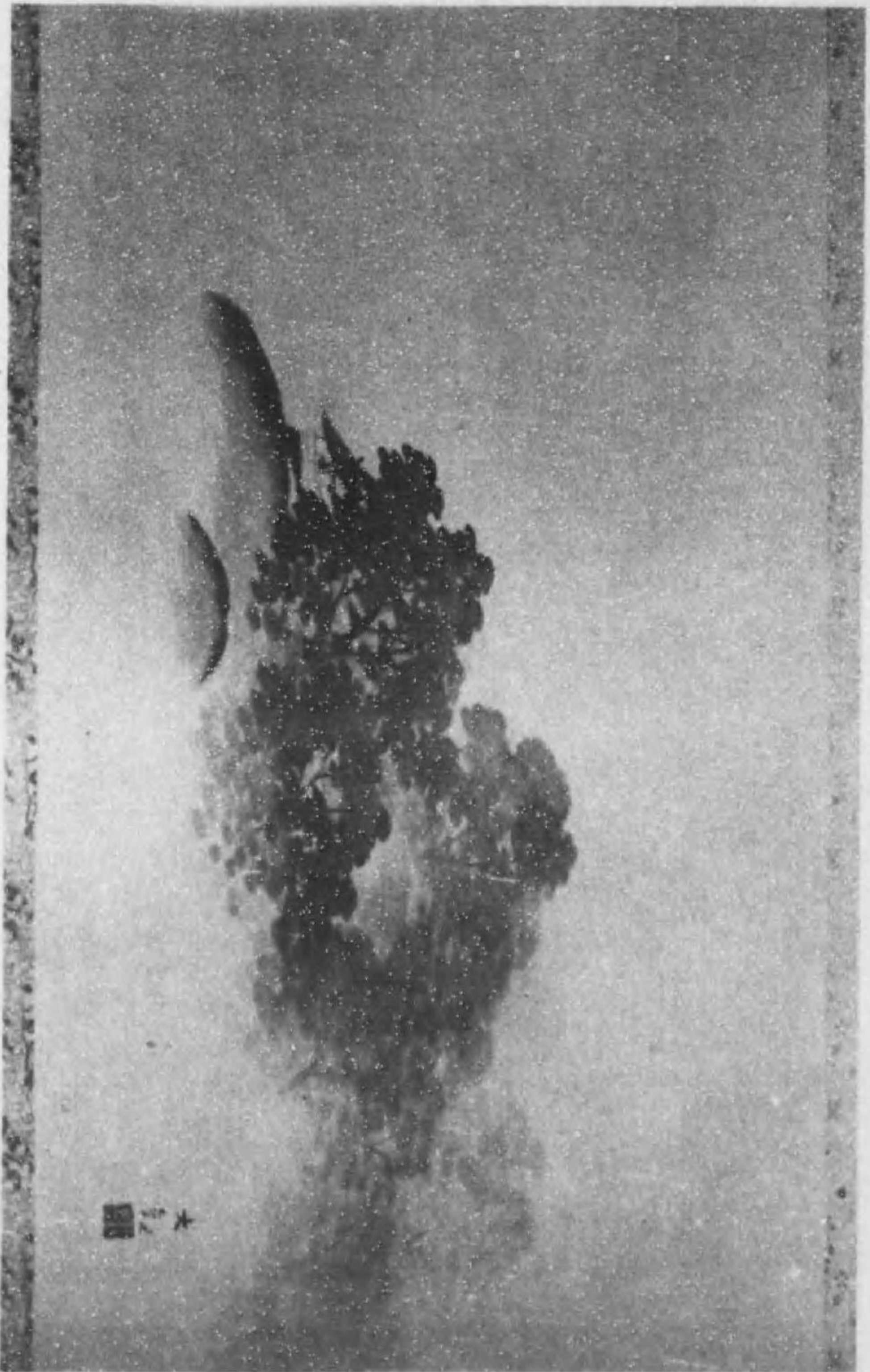
竹内栖鳳畫伯「柳柳盛暑」圖

第三版



竹内栢鳳畫伯「柳柳盛暑圖」

第三版



橫山大觀畫伯「月明」圖

第四版

新製日本畫紙案内

上、はしがき

私は、先祖代々、奉書紙と云へば越前の五箇と、三都は愚か、津々浦々迄知られてゐる紙の産地に生れて、幼少から製紙には馴されて來ましたが、數年前から、圖らず書畫用の純日本紙を作り上げ、國産品として恥かしくないものにしたいと考へて、コッ／＼試験的にやつて見つゝ、京都の富田溪仙畫伯や、竹内栖鳳畫伯、東京の横山大觀畫伯などの御指導を無理にお願いして、何回となく實驗を重ね、此頃ではどうか、諸畫伯の御試用に堪えるやうな、新製品を出すことが出来るやうになりました。最早、この製品は、屢々諸先生の靈筆を走らせて、帝展院展はじめ、諸展覽會上の異彩となる迄

になりました。そこで、このやうな乏しい仕事にも、段々と世間の注意が向けられまして、各方面から、製品の御注文やら、御問合が参りますので、私としては、感謝の念に満ちつゝ、御返事をしてゐる次第であります。つきましては、此際一層のこと、この新製品を出すに至つた、我郷里の製紙沿革やら、諸先生の御意見など、追つては新製品の御案内などを、一まとめにして、小冊子として、御愛顧の方々に差上げた方がよくはないかと氣付いて、取急ぎこの一冊を製へました。

呉々も、私としては、尤も喜ばしい目的物の完成——一段落をつけて彌々發賣の出来るやうになつたのにつきましては、一つには、長い世紀の間製紙業をつゞけて來た我が郷里の恩徳を想ひ、猶一つには、免倒な指導をして頂いた諸賢の恩恵をしのばすにはゐられません。新製品に「大瀧」「大徳」と名付けましたのも、愛郷の微意から郷里

の名と山の名とを取つた次第でございます。

中、五箇の紙

一、越前五箇。私は御案内の順序として、先づ郷里——製紙の本場五箇の土地を一通り説明致します。一體五箇と云ふのは、俚稱でありまして、正しくは、福井縣今立郡岡本村の大部——大瀧不老岩本新在家定友の五大字に該當します。そこへ参りますのには、北陸本線を武生驛で下車して、陸橋を東へ渡りますと、南越鐵道の新武生驛に出ます。その列車は、約一時間をきに發車しますから、其に乗つて十分足らずで七つ目の停車場が岡本新驛になります。茲で下車すると、既に所謂五箇の邑々が眼前に粉壁を示してゐます。前面には、東を遮ぎつて、大徳山がみづ／＼しく聳え、山麓を取巻く五つの村は、可なりの規模を有つた工場や、烟突を交えつゝ、自ら

附近の部落とは異つた景物を、行客の眺めに任せます。全く、この
联接五大字は、過半は、製紙業に携はつてゐます——漉屋仲買漉子
問屋、其等が岡本川を挟んで、戸數で云へば總て六百餘戸、よし、
一時の盛衰は免れないにしても、古代から現代迄、紙の五箇で續い
て來てゐます。勿論日本紙漉立を主とする關係から、それ程大動力
を使用する必要に達しませんので、概して、どこでも非常な大規模
な製造所を構えてはおりませんが、その代はりには、二六時中、絶
えず勤勉な漉手の小唄が、工場を流れてゐます。その、岡本川の最
も上流に沿ふた、五大字中での主邑、大瀧の村半ば、南の谷合道を
山際に沿ふて、私の岩野製紙工場は立つてゐます。

二、製紙のはじまり。五箇の製紙の起源は、餘程古い時代のや
うでありまして、村の總鎮守、大瀧神社の攝社岡本神社の祭神が、
村人にその術を教へられたと云ふ傳説になつてゐます。その神社は

もと／＼式内で、岡本川の水上に鎮座してありましたが、始め、そ
の御祭神水波能賣命は端麗な乙女となつて出現し、被衣を脱いで竿
頭に掛け、村民に製紙術を傳へ、その河水、都の鴨川に譲らず、美
はしき紙意の如く造られんと詫言せられたのが、斯業發達の基にな
つたと傳へてゐます。私等同業者が、今猶、抄紙工場に竿を吊す遺
風は、女神の故事を示すものだそうで、郷土に結び付いた習俗とし
て、如何にもなつかしく思つてゐます。その神社は後兵火に會つた
りなどして、遂に大瀧神社の攝社になつたのでありますが、川上御
前の尊稱のもとに、同業者の崇敬の的になつてゐるのは、云ふ迄も
ありません。この御分靈は、一昨年東京の印刷局抄紙部へ奉遷され
て、その祭神となつたことも、こゝへ特筆して置きたいと存じます。
三、奉書紙の製造と領主の保護。極く古い時代の、抄紙の委
しいことは、到底解りません。今から雜と六百年前、斯波氏と云ふ

足利幕府の老臣が、越前の守護となつて参つた時分、大瀧で御用の御教書紙を抄出してゐましたが、その出来が頗る立派であつたので、自來奉書紙と名づけられるに至つたと傳へられてゐます。其時の御用漉屋は、土豪三田村掃部と申して、永く紙業の元締として、明治時代に亘つてゐます。斯波氏の後、一乗谷の朝倉氏が、代はるやうになつても、同家は相變らず奉書の御用を勤め、信長の時には七寶の捺印を許され、色々の特權を與へて、漉出しの保護をせられ、豊臣氏は、更に桐の紋を捺すことを許し、奉書の名は段々と高まりました。天正三年十月に、信長の三奉行が、大瀧神郷紙座衆あてに出した特許狀に、一、上者木目を境、下者淺水の橋を境、東は境目、西は海端を境、如前々不可有諸役、並地下夫役不可有之とありますのは、その範圍内での、營業税及び夫役を免除されて、あつく保護された例證であります。そして、一方では、段々と似せ紙が出来まし

たので、濫造を防ぐ爲め切りに禁令を出してゐます。又、奉書の外、鳥の子紙の漉出しも盛になつて参りました。

四、舊幕時代の盛況。

その後、今から三百年あまり前、五箇は福井藩の領地になりました。最初の領主秀康は、早速三田掃部に宛て、奉書紙の專賣を申付け、又、定友以下五ヶ村紙屋に對して、たけ^長たか^高まさむね奉書の製造を禁じてあります。之で見ますと、當時は餘程漉出しが盛になり、又、長高以下の三品が、主な御用品となつてゐたことが解ります。一方、朝廷の御用品にも採用になりました。後、聖護院宮から日本一御奉書屋の御沙汰を頂いてあります。

江戸幕府へは、寛永頃から、御用達を言付りまして、和泉以下、四戸の御紙屋が定められました。そして、大廣中廣大高中高廣正紙を和泉の支配として、五箇各村の製品を一まとめにして、その判形を捺して、諸方へ納める仕組になりました。それから、元祿頃にな

りますと、福井藩が、大瀧に紙會所を建て、専賣組織を執るやうになりましたが、その仕組は、一度中止になつて、亦復活し、幕末に至りました。當時、製紙の種類は、安永六年江戸出版の、「新撰紙譜」によりますと、大廣御前廣大奉書小奉書色奉書紋奉書墨流が擧げられてありまして、上品は五箇に限ると云ふ風に書いてあり、奉書所は、各種取交せて十五軒、漉屋はその頃二百五十軒、仲買は八十軒、雜と合せて三百五十軒程、製紙に等從事してゐたことになりま
す。あまり細々した、古いことを書きつゞけますので、讀者の御迷惑とは存じますが、猶少し書き續けさせて頂きますと、製品の捌ヶ
口は、全體の八分通りは江戸、二分通は京大坂などへ振り向けられ、
盛な時には江戸だけで、一年平均各種奉書十萬帖程賣込まれたこと
になります。斯の絢爛を極めた、精巧な江戸繪も、上品なものは、
皆この奉書にすり込まれたことを思ひますと、私達は、その子孫と

して、非常に愉快を覚えます。猶、御用達の首班、三田村和泉など
は、幕府に於いても、頗る特權がありまして、御用荷車は自由に城
内の諸門を往來し、元文元年には、南傳馬町三丁目に、屋舗地を下
附せらるゝ勢でありました。

斯くして、五箇の紙は、朝廷幕府、及び福井その他の諸藩に納入
せられ、亦福井藩の藩札用としても、すべて役に立てられたのであ
ります。

それから、猶一つ、私等子孫のものとしての誇りは、この地の製
紙業が、段々と名高くなつて、その技術が、各地に習得され、それ
／＼産業勃興の起因となつたことであります。九州の製紙の如きは
文祿中、土地の法華僧が筑後に留錫して、矢部川の水質が製紙に適
するのを知り、郷里から俗弟を呼んで、立花侯の保護の下にその業
が興り、だん／＼その術が肥後筑前肥前に遷つて、今日盛況のもと

をなしてゐます。又、松江の松平侯なども、苦心して五箇奉書の漉立を雲州に傳習せしめてゐられる歴史が残つております。

五、明治以後の發達。 明治維新の際には、五箇の紙は、非常に新政府の御役に立つてゐます。其は、福井藩の徴士三岡八郎(由利公正氏)が、財政の急に處する爲め、金札發行を建議して、御採用になり、慶應四年三月此地で數十萬枚の厚紙を造り、各種の金札に切斷して、京都へ送らしめ、御用のものは他所移住を禁ぜられて、銳意この抄造に従事させられました。然し、それも明治四年七月に中止せられて、従業者はひどく困つたのでしたが、眞柄西野加藤氏等の先覺者が、だん／＼出てきまして、或は會社を組織したり、光澤紙を造つたり、印刷局の周旋でロールを貸下げられて改良紙を作り上げ、又印刷紙透入紙などが抄出されるやうになりました。その光澤紙等は販路を歐米支那に開くやうに進んでまゐりました、それと同

時に、固有の和紙、奉書鳥の子加工紙檀紙の如きも、工藝並びに式禮用として、益精選せらるゝやうになりました。以上は、屢々海外及び内國の大博覽會等に出陳されまして、賞牌を得たことは、數へるに追がありません。又、宮内省はじめ、各所の御用品としての榮譽を擔ひ、五箇の紙の名聲は、依然として高まつてゐます。明治三十六年に、越前製紙組合が創立されましたからは、製造者商人を一團として、一層強固の發展を見るに至りました。そして、一面大工場組織をとるものは、武生方面へもその根據を移すやうになつてまゐりました。御参考までに、産額の統計一斑を記しますと、光澤紙奉書紙襖紙の順序で、大正初年以來年額總計、六十萬圓から八十萬圓を上下してゐます。

下、「大瀧」「大徳」紙の完成

六、日本畫紙の製造と研究。以上述べて参りました如く、長き年代を経て、段々發達した五箇の紙は、その種類も、今日では随分と多數に亘つてゐますが、その中、産額はともかくとして、最も特色を示してゐるものは、矢張奉書系統の純日本紙でございます。その紙は、一般に知られてゐる如く、肌があく迄こまやかで、和かみがあり、この上なき品位を持つておりますので、江戸時代、民間美術の粹である、浮世繪の刷紙にも用ゐられたのでありますが、それが、明治以後になりますと、一層舊來よりも精巧に出來まして、日本畫紙専用の製品を見るに至りました。明治三十年代に、漉出され西野商店あたりから發賣された雅邦紙は之でありまして、相當兩都の間に輸出せられ、次で、大正になつてから、大昂紙なども、商

品となつて表はれました。此等は、京都の水谷、東京の榛原商店などから、主に顧客の方々の手に渡りました、然し、その名は、必しも、雅邦、栖鳳畫伯の撰ばれた製品と云ふわけではありません。商賣屋の方で、便宜命名したものでした。それ迄、私の家は、奉書や襖紙の製造を主としてゐました關係上、此等の畫用紙を注意深く見まして、一層しつくりした精品を作り上げ、一は、畫紙と云へば、支那製品に限ると云ふ、一般の見解を破り、國産として恥かしくないものを作り、一には、紙本の位を高めたいと考へました。私は、淺學でよくは解かりませぬけれども、博物館や、古社寺富豪に陳列蒐集されてある繪畫書迹の逸品が、紙本に認めてあるものは、色調をはじめ、種々の點で、畫かれた方の心持をよく、保つてゐるやうに思はれ、保護の點から云つても、絹本は、到底紙本にはかなふまいと考へました。その點になりますと、どんな紙でも、絹に勝ると云

ふわけには行きません。ひいき目ではありますが、奉書系統の紙は、第一、墨色のにじみが非常にすぐれた特色ではありますまいか。然も、素人にでも、その缺點——紙が和かに過ぎて、線緯が解け易いことと、墨のにじみが度に過ぎて、筆のかすりと云ふ様な微妙な點を示すのには、不適當ではないかと思ひました。それは、既成の雅邦紙・栖鳳紙にも通じて見られる、缺點のやうでございます。

七、完成迄。その頃、私は、大阪の内畑氏が特許權を得て、製造しつゝあつた金潜紙、若しくは銀潜紙などの渡込をしてゐましたので、三都の著名な紙業者の方々と懇意になり、その中、富田溪仙畫伯に紹介されました、段々と日本畫紙改良の御話しを承はり、支那紙にも、色々と缺點のあるのを知りました。それで、彌純粹の日本紙の立場から、新製品を創めてみたいと決心しまして、専心、原料の精選をはじめ、何度となく試験を重ねました。その中に、製品は横山

大觀・竹内栖鳳畫伯に知られて改良の餘地を示され、安田靫彦・小杉未醒・眞道黎明畫伯達からも、屢々製品の試用結果を御知らせに預つて、熱心に接導せられました。それで、原料として或は楮皮の分量を加減し、之に交合すべき材料を撰擇しまして、粗々二種類の新製品を、諸畫伯の御満足を得る迄に、繕ぎ付けることが出来ました。大正七八年頃から始めまして、今迄かゝつたわけでございます。

この中、最も奉書固有の味を有つて和かいものを、諸先生の御意見を承はつて、大瀧紙と名付けました。郷里の名を假つて、紀念した次第であります。この方は更らに純楮のみに近い原料で作りに上げた較々堅い感じのする方を、その第二號としました。次に、猶特種の墨色を出す爲めに、假裏打製のものを作り出して、大徳紙と名付けました。これは表装の際には、裏に刷毛で水を打ち、暫くしてはがして参りますと、表面の畫紙のみとなり、表装に便利となるやう

にしてあります。その題名は、郷里の東を覆ふた山の名にあやかつたのでありまして、その頂上は、神木老樹鬱葱たる靈地で、鎮守大瀧神社の舊趾でございます。

八、新製畫紙の試用と名匠の批評。この大瀧大徳紙の完成迄に、屢々書信を賜はり、又は口づから改良の要點を鞭撻して下さつた、東西の諸畫伯は、亦同時に、少しでもその紙がよき結果を得て瀧立てられた時には、早速之を試用して、その力作發表の材料に使つて頂きました。私は、大正十一年夏の、東京三越に出陳された、大觀畫伯の牡丹を拜見した時、それが自分の紙だと承はつた折りの喜びは、今猶忘れないところでございます。その後、段々と東西諸大家の傑作が、春秋公私の展覽會に表はれるもの多くなつて行くのを見ますると、一層業務に精進して、彼の久しき間、文人墨客の筆硯を獨占した、玉版箋や青六疋の上に出て、豫ての所信を飽く

まで貫いて、郷里及び愛護者各位の恩顧に報むたいと存じております。今日迄、以上申し上げました方々より頂いた、激勵賞賛のお言葉は、少い數ではございません。私は、その中から、少しばかり茲へ拔萃することのお許しを得て、この小冊子を飾りたいと思ひます。

十二年六月、相州大磯、安田鞆彦畫伯より。

○上略大瀧紙の方、本日白描畫こゝろみ候處、ニジミの趣まことに妙にて、大によるこび申候。尙試用を重ね候上、委曲申上べく候。

十三年九月、東京下谷、横山大觀畫伯より

○上略過日は新しき御試みの紙澤山に御送り被下、有難く御受申上候。乍失禮、只今迄頂戴仕候紙本中、今回の分は尤も小生の意に叶ひ、御制方の御苦心御察し申上候。來る十一月、三越催しの淡交會(柄鳳春舉玉堂觀山)柄音の諸氏と小生六名の會出品畫の一に、

白描に候へ共、今回お送りの紙本を試用仕候處、墨色誠に妙にして、眞に衷心より感謝仕候。

十二年八月、東京田端、小杉未醒畫伯より

「○上略先づ、日本製としては、是等を以て尤も精良と存申候。此間の御話の如く、紙にハケ目なくなり申候はゞ、更らに十二分の上紙と思はれ候、まじめなる御苦心をつゞけらるゝことは、筆墨を重んずる小生共にとりて、心つよきことに候。」

十二年六月 京都嵯峨富田溪仙畫伯より

「○上略サロンズオトヌから、日本畫の出品を申來ましたので、貴製の紙に、牛及鬼子母神等を描き、六月三日の船で出途致しました。……日本紙の特徴あるものを、西洋に此際宣傳するの好機と思ひます。尤も畫紙に日本紙を用て出品するのは、初めて位です。」

九、特許と献上。私は、これより先き、大正十二年六月一日附で、

此等の新製紙を、日本畫用紙として、特許の出願を致しました。その公告は、震災で後れましたが、十三年九月五日、第一二三五號を以て通告せられ。十四年二月登録番號第六二四九九號を以て特許済になりました。その文面は、この新製品の要領を示してゐますから、次に附載しておきます。

發明ノ性質及目的ノ要領

本發明ハ日本畫用紙ノ改良ニ係リ適宜ノ日本畫用畫紙本體ト普通ノ「インキ」止法ヲ施シテ澆キタル適宜ノ臺紙トヲ同時ニ別々ニ澆成シ濕潤状態ノ儘重ネ合セ以テ乾燥セシメタル日本畫用紙ニ係リ其目的トスル所ニ破裂皺折ノ恐レナク從テ取扱便利ニシテ而モ染筆ニ適良ニシテ表装ノ際ハ裏面即チ臺紙ヲ剝取り表装ニ適當ナル原紙トナルモノナリ

特許請求ノ範圍

本文ニ詳記シタル如ク適宜ノ日本畫用畫紙本體ト普通ノ「インキ」止法ヲ施シテ漉キタル適宜ノ臺紙ト別々ニ且ツ同時ニ漉成シ濕潤状態ニ在ル時互ニ重ネ合セ以テ乾燥セシメテ製シタル日本畫用畫紙次に、大正十三年秋、皇太子殿下、陸軍大演習御統監の爲め、北陸三縣へ行啓遊ばされた際、福井縣は、縣下の代表的特産を撰擇して、之を殿下に奉呈されましたが、その際、岡本村では、縣と合議の上大漉紙を献上することゝしまして、その手續をし、首尾よく、この新製品は、その世上發表の首途に、幸よき光榮を擔ふことになりました。これ、私の恐懼に堪えざると共に、家門一代の光榮と存する次第であります。大正十三年十一月八日附で、東宮大夫伯爵珍田捨巳氏から、竹下岡本村長宛の進達書には、

一、大漉紙拾貳枚

右 皇太子殿下へ献上相成候に付御披露致候此段申進候也

と認めてございます。又、同時に、多數製品の御買上を忝う致しました。私は、一層感奮して、斯道に努力すべく勉めたいと存じます。

武生驛で、南越鐵道と云ふ汽鐵はついてゐるが、電車式の客車が二輛あるのに乗換へ、岡本新と云ふ驛へ下りたら、肥大な岩野氏が、チャンと出迎へてくれたのは嬉しかった。アノ麓に見える林中の家が宅であると教はり語りながら、静かなお正月氣分の里道を、曲り／＼邸へ着いたのは、九時過ぎてあつた。同氏の工場で抄造した、玉版紙風で、然も潤ひのある大漉紙へ、最近筆を染めた、栖鳳大觀・淡仙などの大作を拜見して、紙漉工場へ案内された。工場は、最近絶壁を開鑿し、その冷氣と潤澤な清水を應用して、擴張されたので、昨年大演習の節、攝政宮殿下へ献上したと云ふ、幅五尺餘丈七尺もある大漉紙を漉き上げた。廻轉上下自在な轉轆式、乾燥場、見本室等數棟に分れてゐるのを、隈なく見廻つて、序に、主人の案内で、本邦唯一の紙神を祀つたお宮へ參詣した。……

チラ／＼雪が降つて來たので、奥の院までの登攀はやめにした。戻り路に、あたりを顧ると、余り高くもない山々が、幾つも屏立し、其の嶺まで紙の原料になる種々の樹が植ゑられて、折からの雪に、枯林が隈取られ、薄霞が棚引くあたり、どこことなく、百舌鳥の聲がしたり、又足許には潺々たる清流、さながら仙境の心地がした。……

雜 觀

汽罐車に小きき輪飾つけられぬ
糊棚から蘭玉さがる室さむし
いてゆ行の初旅人を羨めり
山國の漉初めもせぬ紙の村

(越前五箇行 桂井未翁)

新製日本畫用紙價格表

○大 瀧 紙

登錄 商標 

壹號	い印	六尺八寸××三尺	同十枚	八拾圓
	わ印	六尺八寸××三三三	同同	六七圓五錢
	の印	六尺八寸××三三三	同同	三四圓
貳號		六尺八寸××三三三	同同	拾貳圓

○大 德

紙 (專賣特許) 日本畫用畫紙 (登錄商標) 

い印	六尺八寸××三三三	同十枚	拾貳圓
----	-----------	-----	-----

わ印	六尺二寸×三尺	同	七圓五十錢
の印	六尺二寸×三尺	同	六圓五十錢
	四尺八寸×三尺	同	四圓

以上何れも送料十枚一筒毎に十八錢

この方の表面紙質は、御好みにより、舊來の栖鳳紙、雅邦紙、その他何質のものでも出來致します。猶、大瀧大徳紙を通じて、特別用の爲めには、幅三尺五寸縦八尺五寸のもの、又、幅四尺八寸縦六尺五寸のものをも貴需に應じます。御望みによつては、貴名透込みも致します。發賣は、最少、紙筒一個毎に十枚入と致しましたから、可成十枚單位の御注文が御便利と存じます、總て、前金か代金引換に御願します。尤も價格は時々變動がありますから、御含みを願ひます。

見本、三錢切手三枚封入御申越の方には、新製品一通の見本を差上げます。

其他の營業課目

奉書紙・鳥の子紙・雲華紙・打雲紙・飛雲紙・金銀砂子紙・水玉紙等美術襖紙一切製造販賣

福井縣今立郡岡本村大瀧

岩野平三郎

電話 四十二番
振替口座金澤二二六六

284
429

(上略)此度御調製被下候用紙到着開封手さわりの柔和なるに満足仕候直に水墨一掃相試み候處潑墨淹注生氣浮動畫成らすして已に筆墨あり畫紙として多年の希望に適ひ且生紙のまゝ濃厚なる設色するも是亦鮮麗に紙本趣味の見へ候は從來御送附被下候ひし漉き方にて殆成功と可申乎數年に亘りて段々の御工夫感謝の至りに候今後尙心付くことは無遠慮可申上候(下略)

三月二十九日 ○大正十四年

京都 竹内栖風畫伯より

(八二)

大正十四年五月二十日印刷
大正十四年五月三十一日發行

福野縣今立郡開本村

編輯兼
發行人 岩野平三郎

東京市神田區美土代町二丁目一雷地
三 秀 舎 印 行

終



織田右府
免許
奉書紙
印列



豊太閣
免許
奉書紙
印列